

『エターナル・コーデイング無料講座』



第1回 見るだけで変わる!!オシャレの概念



齋藤 こんにちは。齋藤優です。

内田 うっちーこと、内田裕士です。よろしくお願いします。

齋藤 よろしくお願ひいたします。今回、内田先生、通称うっちーと呼ばせていただいて大丈夫ですか。いつも通り。

内田 いつもいつも、愛称で呼んでいただいてありがとうございます。愛していただいてありがとうございます。

齋藤 こちらこそ、ありがとうございます。そんな愛されうっちーなんですけれど、今回は新しいお話が聞けるということなんですけれども。

一旦とりあえず、うっちーって誰ぞやと思っている人のために、うっちーから軽く自己紹介をお願いします。

内田 分かりました。

初めましての方、初めまして。美塾という一般女性向けのメイクの教室を主催させていただいております、内田裕士と申します。

美塾というのはですね、「らしさが美しいを文化に」という理念で始めた女性のお稽古事ですよ。12年経ちまして、今、日本各地で教室が26拠点、講師も私以外に28人おりまして、修了生が6,500人になったっていう。

齋藤 6,500人。また増えましたね。

内田 増えました。毎回プロフィールもやっぱ、どんどん更新しないと追いつかないです。

齋藤 そうですよ。書き直しときますね。

内田 そうそう、そうそう、本当。だから、優ちゃんと出会ったときから、多分もう 1,000 人位増えてますよね。

齋藤 そうですよ。もう、びっくりですね。破竹の勢いですね。

内田 そうですね、嬉しいですね。でも本当、優ちゃんもどんどん綺麗になって。

齋藤 嬉しい。

内田 そんな感じでさしていただいております。

齋藤 他にも活動は色々されているんですよ、心理学のほうとか。

内田 そうですね。私、メイクの教室を始めたんですけども、やっぱり教室に通ってどんどん自分の顔が好きになって、自分に自信が持ててっていうのが望みで、僕の。

そういう人を 1 人でも多く増やしたいって、皆にそう思ってもらえるような、幸せになってもらいたいってところからメイク始めたんですけど、やっぱりメイクに自信が持てるようになってくると、もっと人間関係よくしたいとか、あとはもっと恋愛したいとか、あと起業したいとか。

自分でできることなにかないかってことで、色んな卒業生の方たちのステップアップを見届けていく中で、コミュニケーションがあれだったらって言って、個性認識学講座っていう講座なんですけどね。その講座をさしていただいたり。

あとは結婚したいけどなかなかできないって人のために、半年間の映像配信だけで結婚が決まっちゃう LOVE 革命っていうのね、さしていただいたり。

齋藤 あれはもう強烈でしたね。

内田 そう、やっぱり。

齋藤 見させていただきましたけど。

内田 いいよね。

齋藤 凄いですね。

内田 1番やっぱ感動的だったのは、40歳で彼氏いない歴40年っていう方が、その映像見て本当に半年以内に結婚したんですよ。僕、本当嬉しかったですね。

齋藤 40年ですよ。

内田 ですよ。その方からメール来たんですよ、そのあとまだ結婚決まる前にね。いよいよ出会いがあった、進展していった中で、その方がこうやっていったんですよ。

「うちー先生、聞いてください。今日私、彼とチューしたんです」って。ええっ、みたいな。チューですよ。なんか嬉しくないですか。

齋藤 嬉しいですね。

内田 なんかね、感動したっていうか。それと同時に、いてもたってもいられない思っているか。だってそういう人、いっぱいいると思うんですよ。

齋藤 そうですね。

内田 40歳で彼氏ができなくて。恐らくですよ、もしかしたらですよ。チューもしたことのないって。

齋藤 そうですね。

内田 いうのって、それ別に絶対よくないとは思わないけど、もしそれが自分にとって、本当は欲しいものなんだよな、とか思ったりすると、なんか助けてあげたいっていったらおこがましいけど、してあげたいっていうかなんか、ちょっとしたことなんですよ。だから、そういうの、やっていますね。

齋藤 でも、そのちょっとしたことすら、普通の、一般の人はなかなかおしていきにくい部分もある中、うちーは上手にグイッと入っていきますよね。

内田 そうそう、そういうの得意なんですよ。はまっちゃってるだけなんで、それに僕は結構、これ、こういうところはまっちゃってるだけだから、ちょっとこのブロックどかしてあげて、次行けるなみたいなのが、見つけるの得意なんですよ。

齋藤 それ、凄いですよね。

内田 で、それが本人ができるようにサポートして、見届けるところまでが結構得意なんで。

だから、講師養成も普通のお稽古の中では講師養成に来た人が講師になる確率ってのも、ここ最近の3教室、プロ養成コースで来た人で正式に条件を満たして講師になった人って8割超えるんですよ。

これも多分、そんなにそこまで育てきるっていうのはレアなケースかもしれないんで。でも、できるようになるまでっていうのは、得意なんですよ。

齋藤 そうなんです。そんな、ちょいっとどけるのが得意なうちーが、今回はなんとファッションに進出することなんですけど、これはまずはどういった経緯からなんですかね。

内田 それこそ、フォレストさんで本も出ささせていただいて、そこからハッピーレーションアカデミアっていう、フォレストさんと初めての、共同企画があって。僕もそれ、凄くやりがいを持ってやらさせていただいてるじゃないですか。

どうしてもやっぱりその中でも、ファッションってきちんと時間を持って扱えそうで扱えなかったり、実際、美塾自体もファッションを教える時間っての、当然ないんですね。

齋藤 あ、メイクですもんね。

内田 そうそう。うちの講師陣がやっぱ、それぞれ魅力を発揮して生きてるんで。彼女たちが個人的なアドバイスであなたにはこういうのがいいよとか。先生によっては生徒様と一緒に買いもの同行とかもしてるんですけど、もうちょい魅力マトリックス別のファッション。

ファッションに重きを置いてるっていうより、コーディネートっていうか、魅力のほうが大事っていうか。ファッションがオシャレになるっていうより、どっちかっていうより魅力が活きてる、魅力的な人になるっていう感覚なんですよね。

齋藤 なるほど。じゃ、ファッションが先なのではなく、その人の持っている魅力を活かすために服があるっていう感じですかね。

内田 そうそう。そもそも僕そんな、自分っておしゃれじゃないと思ってて。僕の地元と、僕、専門学校の友だちは、今も友だちは皆、僕のこと、ダサいって。

裕士はダサいとか、内田はダサいっていうのが、結構定説で。

齋藤 そんな、こんなにお綺麗になさっているのに。

内田 これ、全然おしゃれじゃないですよ。

齋藤 え、そうなんですか。

内田 ただ、差し支えないっていうか。自分が人生を全うするには差し支えない位にはなってるかなと、いう感じで。

僕はそれでいいと思ってるんですよ。それでいいっていうか、それでもいいと思ってる。

齋藤 それでもいい。

内田 だから、ファッションが好きな人とか、色々試していきたいとか、どんどん時代の流れに対応してファッションナブルに生きていきたいって人は、今回の話って別になくてもいいかもしれないですよ。

だけど、ファッションに追い、まくしたてられるっていうか、これ着なきゃいけないんだっただけ、こうしなきゃいけないんだっただけっていう、それに巻き込まれる必要ないよっていう。僕なんか流行なんかまるっきり無視してますから。

齋藤 それでいうと、雑誌とかってその流行っていうものを結構追い求めてるところがあるんですけど、あれについてはどうお考えになりますか。

内田 やっぱり好きで楽しんでる人にとっては、プラスのツールでいいと思うんですけど、ああいうのに1歩間違えると、そうじゃない、あなたはダサイ、みたいにそういうものがあるせいでっていうか、本当は別にせいでなんでもないので、そう思いこんじゃうわけですよ。

常々変わっていく流行とか傾向とかに対して、押さえられてない私、ダメなんじゃないかなとか、もはやわけ分からんみたいな。

齋藤 もはやわけ分からん。

内田 そう。

齋藤 そう思ってる人、いっぱいいると思います。

内田 だって、雑誌って毎月出てるじゃないですか。毎月作ってる側からしたら、当然先月と同じこと書けないっすよね。どんどん毎回新しいこと書かないと読者さんに飽きられちゃうじゃないですか。

でも誰しものが、初めてって、初めて買うときってあるわけですよね。でもその、初めて買う人用には作られてないじゃないですか。だから凄いなんか、濁流に飛び込む勇気みたいな感じ、ありません。

齋藤 滝壺に。

内田 そう。

齋藤 ドーンみたい。

内田 ファッション雑誌を、買って見る、みたいな。

齋藤 そうですね。

内田 多分優ちゃんとか、若い頃から買う習慣とかあったのかなと思うから、あんま抵抗ないと思うんですよ。

齋藤 そうですね。一応買っては見てたんですけど、途中でやっぱり疲れてきちゃって、そういうふうになると、どんどんこう、雑誌から遠のいていくみたいなものはありましたね。

内田 そういう前進し続けていくものに対して追いかけて行ったり、それを作っていったりってしてる人たちはそれで生きる喜びっていうか、豊かさを感じていいと思うんですけど。

そこにもう疲れてるとか、そもそも追いつけないとか、そもそも流れを岸から眺めるので精一杯みたいな人にとっては、僕の考え方、これ今から話すようなことってほっとするんじゃないかって思うんですよね。あ、よかったみたいな。

だって、変わらないですもん、魅力って。魅力は変わらないので、ってことは、ファッションも変わらなくていいんですよ、そんなに。

だから、流行がお肉で魅力がソースじゃなくて、魅力がお肉で流行がソースっていうか。

齋藤 でも、そっちのほうが健全ですよ。

内田 でしょ。でも、そうなってみると、また雑誌とかテレビ見ると、魅力ってものに対する情報がやっぱり少ないので、こういったかたちを通してね、伝えられたらいいかなと思うんですよ。

齋藤 なるほど。なんか、ファッションもファッション誌も結構、傾向があるかなっていうふうに思うんですけど、魅力のスペシャリストであるうちの観点から見ると、どんなふうに見えるんですか。

内田 それ、前も話してたんですけど。実は雑誌って、あれは年代別にターゲット層絞って作ってるってところ、あるじゃないですか。

そうなんですけど、実はそこが結果的には魅力別に作られてるんだってのが、僕は仮説を立てたわけですよ。

なんでかっていうと、例えば 10 代の頃って、あるいは 22 歳位まで、学生の頃までって。いわゆる女の子っていうか、例えば中心にあるのはモテたいとか。モテたいっていう感じじゃないかな、女の人は。

大好きな人に愛されたいみたいな感じだと思うので、凄く可愛い感じがどうしても優先的に上げられるんですよ。いわゆる赤文字系とかも、ほとんどそこに入ると思うんですけども。

そこって、実は元々可愛らしさ持ってる子が似合うんですよ。

齋藤 CanCam とか。

内田 そう。

齋藤 AneCan は違うか。

内田 AneCan はちょっとずれてくるんですよ。CanCam とか、More とか。あとはちょっと違うけど JJ とか。

齋藤 はいはい。Zipper とか。

内田 あのへんってのは、可愛らしい子が似合うんです。

だから僕は 30 代中盤位の女性にも More を読んでくださいとか、いいます。CanCam が似合いますとか、いいますよ。

そうすると、「えっ、そんな若い子の雑誌、読めない」とかいうんですけど。でも、年代で分けるってよく考えたら変ですよ。

齋藤 そうですね。

内田 だって、各年代に色んな顔の人いません。

齋藤 そうですね。

内田 だから本当は年代で分けちゃダメ。ダメっていうか、年代で分ける理由ってのは、本人が買いやすいんですよ。

齋藤 そうですね。服を買うときも、年齢が私はもう 30 を超えたから、この服ではマズいっていうので買いに行ったりとか、しますもんね。

内田 化粧品とかもそうですよ。例えば、乾燥肌用って書いてあるじゃないですか。したら、なにがいいかっていったら自分が乾燥肌だと思ってる人が買いやすいんですよ。乾燥肌ってなんの肌って話じゃないですか。

もっというんですよ。夏用ファンデとかですよ。ないですか、夏用ファンデって。いつから夏なんですか。夏至？ でもじゃ、あれなんでいいかっていったら、本人が今夏だって思ってるときに夏じゃないですか。だから、夏用ファンデとか書いてあったら、今夏だなぁって買いやすいみたいな。

いつのこと、夏っていつのみたいなの。で、夏だとなにが違うと思ってるのってのに関して、そんなに言及されてないとか。

齋藤 ということは、買う理由にしかなくてないっていう感じなんですか。

内田 1 歩間違えるとその位にマーケティングの進化がある意味でそういう弊害も生んでるところがあるんじゃないかなと思うんですよ。

齋藤 なるほど。

内田 いいものよりも、売れそうなものの開発のほうが進化が早い、みたいな感じがあるじゃないですか。だからそのへんがもしかするとさっきの濁流と同じように、私たちを幸せにしてんだっただけじゃないけど。

あるいは、それで幸せを得られてる人はそういうところ、別に否定的に見ないわけだからですけど。

僕はそこを否定したいんじゃないで、そこに対してなんかやられとるわ、私、じゃないけど、疲れてたり、うまくいってる気がしない人にとっては今からの手だてが良いんじゃないかなって感じですね。

齋藤 なるほど。で、先ほどから端々に魅力っていう言葉が凄いいっぱい出てくるなというふうに思ってるんですけど、その魅力、つまり内田さんのスペシャルテクニックである魅力マトリックスについて、ちょっとお伺いしたいなと思うんですけども、具体的にいうとどういった内容なんですかね。

内田 シンプルにいうと、女性の魅力を 4 種類に分けるっていうもので。クールビューティーの凛、いい女系の艶、愛されキャラの萌、癒し系の清。この 4 種類なんですよ。

女の人って全員、この 4 つのどこかに入るんすよ。それが、自分はどこに入るかってのが分かるだけで、だいぶ違いますか？

齋藤 そうですね。そこ、魅力が自分で分かったらそこから、あなたはこの魅力があるから、この要素が強いですよっていうのが分かるっていう。

内田 そうです、そうです。魅力別で似合うメイク、似合わないメイクってあるわけですよ。もっというとな当然、似合う髪型、似合わない髪型もあって、もちろん似合うファッション、似合わないファッションってのがありますよ。

それは、やるかやらないかは別として、知っといたほうがいいと思いませんか？

齋藤 そうですね。せっかく自分の持っているものを活かせるのであれば、そういうのあってもいいですよ。

内田 そうそう。自分の顔って好きとか嫌いとか関係なく、もう決まってるじゃないですか。明日もこの顔で、基本的には起きますよね。

齋藤 そうですね。起きて違う顔っていうことはまあ、ないですよ。

内田 年輪みたいな感じで少しずつ変わってってよりっていうのはありますよ。でも、根本的な素地っていうか、は変わらないと思ってるし、それが僕の仮説でもあるんですけど。

変わらないものにきちんと気づけて、それを最大限に活かそうと思うと、ある意味いくらでも変われるっていうか、変わらないものが変わらないんだって気づけると、他の全てを変えていけるんですよ。よりよくしていけるんですよ。

だけど、変えられないものに、そこに嫌だって固執してると全てが変わらないっていうか、あるいは全てがうまくいかないことにもなりかねないわけですよ。

だから、女性にとっての魅力ってのは、その最たるものっていうか、本当につくづくそうだなって思うもので、それはもうメイクでも散々12年ですか。12年やってきましたから。

齋藤 12年。

内田 12年で6,000人以上見てきたら、まあそりゃこうだろうなっていうの、あるじゃないですか。

齋藤 まあ、そうですね。それだけ見ていれば。

内田 しかも、うち宣伝してないんですよ。

齋藤 そうなんですか。

内田 宣伝してなくて、よくロコミっていうじゃないですか。ロコミだけでみたいなの、僕らはロコミもあるんですけど、顔コミって言ってて。

齋藤 顔コミ。

内田 そう、顔コミ。

通ってる方がやっぱり、魅力がより輝くので、なにをしたのって聞かれるわけですよ。なんか違うよねって。私、変わった。美塾っての、行ってるんだ、なんつって。そしたら、嘘、私教えてよってなるじゃないですか。

だからやっぱり、対人、対外的に見て変化してることを繰り返さないと、やっぱり広告宣伝せずにそこまで広がらないと思う。

齋藤 そうですね。

内田 そういう意味では僕らはガチンコでやってきたわけですよ。

齋藤 対顔って言うことですよ。

内田 だって逆にですよ。そこで対人的な結果が出てなかったら、いくら私が美塾に通ってたとしてね、

「ねえ優、すっごいいい教室行ったよ。メイク教室でね、楽しくてね、めっちゃくちゃ綺麗になれて、私の魅力がもっと増してね」って言うてるこの人の顔が変だったら、いけないでしょ。

齋藤 そしたら、そうですね。

内田 ええ、みたいなの。

齋藤 そうなんだ、みたいなの。

内田 ヒロコ、頑張ってるね、みたいなの。なると思うんですよ。だからそこもちゃんと、それが起こらない限りは私たちは間違ってるって。

だから、広告しないってのもあるんですよ。広告したら、本当に結果が出てなくても広告のキャッチがいいと、来ちゃうじゃないですか。

その繰り返しての、僕はしたくなかったの、だからそういう意味では本当に1人1人と向き合って、始めたときより理論として変わってきたこともいっぱいあるし、なんてことはね、思ってますよ。

齋藤 そうなんですね。じゃあ具体的に、先ほど、凛、艶、萌、清の4つが出てきたと思うんですけど、その1個1個の要素って具体的にいうと、どういった要素になってくるんですかね。凛だとかっこよくて。

内田 そうですね。凛はさっきいったクールビューティーですから、凄いかっこいいですよ。女性が憧れるような女性って感じですかね。よく宝塚の男役になるような人とか。

齋藤 かっこいいですね。

内田 凛の方、多いし。とにかく、同性が憧れる存在って凛の方が多いですね。

なんだけど、当の本人はそれが嫌で、キツく、怖く見られちゃうんじゃないかと思って、和らげたりしてるわけですよ、印象を。

齋藤 でも、例えば、天海祐希さんがナヨっとしてたら、ちょっと怖いですね。

内田 でしょ。それは今、天海祐希さんの魅力を発揮した姿を知ってるからなんですよ。

齋藤 なるほど。

内田 だから、ナヨってしてたら変だなんて思うじゃないですか。

でも、天海祐希さんの魅力を持ってる人で洋服から、髪型から、仕草から、全部ナヨっとしてるから。はっきりいますよ。そんなに綺麗じゃない人なんですよ、そうすると。

齋藤 なるほど。

内田 そんなに綺麗な人じゃないんで、変とは思わないんですよ。変と思うってことは、本来のその人の輝きを知ってる場合なんですよ。

齋藤 なるほど。

内田 だから、僕は綺麗な人と綺麗じゃない人がいる、というふうに世界を見てないんですよ。自分のこと分かって上手に表現できてる人と、そうじゃない人って感じなんですよ。

齋藤 もうそうすると、軸からして完全に違ってきちゃうっていう感じなんですね。

内田 そう。多分それが分かってない人って、綺麗な人と綺麗じゃない人がいる、可愛い人と可愛くない人がいるっていうふうに、どうしても見ません。見る人って見ちゃうと思う。

齋藤 はい、見ちゃってます。

内田 正直でよろしい。

齋藤 すいません。

内田 でもそうじゃないですか、しょうがないけど。でもそれは違うんです。全員綺麗な人、全員可愛い人。

綺麗、可愛いもまた分けたりするんだけど、僕がよくいってるのは、全員誰が見ても魅力的な人。誰が見ても魅力的な人位には全員なれますよって、僕いってるんですよ。

齋藤 全員ですか。

内田 なれます、なれます。

齋藤 全員。

内田 なれます。でも例えば今、話し戻すとね。凛の人はそういうふうには和らげようとするわけですけど。やっぱり、それこそ天海祐希さんのようにスラッと、すっきりとした。

齋藤 美しい。

内田 じゃないですか。それが凛でしょ。艶はいい女っていいましたが、色っぽいわけですよ。濃厚な女性らしさ。

齋藤 いいですね。

内田 だから、石原さとみさんとか。

齋藤 おお、彼女も艶ですか。

内田 はい。僕は彼女は艶だと踏んで、いいですね。あとは、滝川クリステルさんとか。

齋藤 ああ。もう、ふふっていわれたら。

内田 トロンとしてるでしょ。

齋藤 そうですね。もうなんか、こうなんていうんですかね。流し目でふふっていわれたら、ときめいやうみたいな。

内田 そう。あとは王道的な人でいうと、杉本彩さんとか、藤原紀香さんとか。あのへんはもうド艶ですよ。

齋藤 お色気ムンムンですね。

内田 そういう濃厚な女性らしさ、色っぽさとかが魅力の人たち。でもこの人たちが、またこれが、色っぽさ出さないんです、一般の人は。

齋藤 そうなんですか。

内田 そうなんですよ。

齋藤 それはなぜそんなことが起こってしまうんでしょう。

内田 色々あるんですけど。まず一つはあれなんですよ。性的な嫌な思いしてる人が非常に多いんですよ。痴漢、いたずら、そっち系。あとは、おっぱい。おっぱいが大きくなるのが人より早かったり。

齋藤 目立っちゃいますもんね。

内田 そう。それで男の子にからかわれたり、なんてすると、自分の女性性が自分の人生を豊かにするんじゃないかと、むしろなんか嫌な要素になるじゃないですか。

齋藤 そうですよ。小学校とかのときで、そういうのでからかわれちゃう人ってよくいますね。いました。

内田 いたでしょ。それって、こう思わないわけですよ。

なんか男子がからかっとなら。私、艶だしなど。男子には今、このタイミングで私がこんななったら、男子は、はしゃぐでしょうっていう、達観した目はないでしょ。

齋藤 ないです。そもそも、そういうのが分からなそうです。

内田 じゃないですか。だから、嫌だってなるわけですよ。

齋藤 なりますね。

内田 あと艶の人はやたら頼もしいんで、ついお願いされちゃうんですよ、色んなものを。頼まれることが多いんですよ。例えばなにかの委員長さんとか、役職とか。だから、もう目立ちたくないと思ってるんですよ。

齋藤 確かに、滝川クリステルさんに頼まないっていうことは確かになさそうですよね。

内田 頼みますよね。

齋藤 やってくれそうですから、お願いしますっていいなくなっちゃいますよね。

内田 オリンピックもやり遂げましたしね。

齋藤 おもてなし。

内田 でしょ。だからね、いいですよ。だけど、それを引き受けられたらいいんだけど、多くの艶の女性はそれが嫌だなど。

可愛くて、皆から守られてる人のほうがいいなと思うわけですよ。頼らないで、私が頼りたいみたいに思うわけですよ。

齋藤 へえ。

内田 これも勿体ないことかもしれないでしょ。

齋藤 もったいないですよ。

内田 そう。で、艶の女性はね、可愛い格好してる人が多いんですよ、ラブリーな。艶っぽい格好、しないんですよ。

齋藤 リカちゃん人形みたいになっちゃう。

内田 なんかね、そうそうそう。なんつったらいいのかな。

艶の人ってときには年より上に見えることも多いんですよ。だから、可愛い格好すると若作りしてのように見られたり、やけに、違和感なんですよ、実は。

齋藤 そうなんです。

内田 だから、本当これは、気づいてほしい。本当に。

齋藤 でも、いますよね。なんかこう、年がある程度いって、しっかりしてそうに見えるのに、下パル
ーンスカートみたいな。

内田 そうそう、本当に。そうなんです。だから、気づくって大事だなと思いますね。

もちろん。別にこれね、僕が今いってる魅力別合う、合わないってのは結局は僕の主観で、主観で
というか客観的な目もあるんだけど。客観的な目なんか関係ないって人もいるじゃないですか。私
は私の着たい服を着て、生きたいように生きるって。そう思ってる人は、僕がいってることなんて
無視していいと思うんですよ。

ただもっと、人生よりよくしていきたいってことの中に対人関係、第三者が絡むんであれば、僕が
いったこと意識的に、例えばこれで自分が艶だなんて分かったら、艶っぽい格好をしてみたい
んですよ。私、可愛い格好のが好きなのにで留まらずに。

そうすることによって、対人関係変わってくると思いますね。

齋藤 そうですね。やっぱ、第一印象ってやっぱりそこからですもんね。

内田 そうそう。それが艶でしょ。

で、萌。萌は愛されキャラっていいましたが、凄く可愛いんですよ。可愛いから可愛がられることも多いんですね、先生からとか。親からも、特別可愛がられたりするってこともあります。

可愛いってのは二つっていうか、可愛さってのは弱さとの裏表なんですよ。弱そうなものが可愛いんですよ、正直いうと。

齋藤 なるほど。

内田 守ってあげたくなるじゃないですか。

齋藤 子犬とか。

内田 そうそう。雨の降る中、ゴミ捨て場に、段ボールに入ってた子犬を見つけたら、どうします。

齋藤 ああって。かわいそうに、かわいそうに。

内田 ねえって。だから、萌の子が段ボールに入って、雨の中、ゴミ捨て場にいたら、絶対誰か拾って帰ります。

齋藤 そうですね。

内田 見捨てられない。

齋藤 可愛らしい子にそんなことされたら。

内田 なに、どうしたのって。凜とか、艶の人が同じことしてたら、どう見えるかっていったら、なにか修行ですかって。

齋藤 新しいチャレンジみたいな。

内田 そう。でね。隣で同じようにする人が現れたりするんすよ。弟子入りが。

齋藤 それに後に続けみたいな。

内田 助けてあげるじゃない、弟子入りさしてくださいみたいな。それ、なんですか、みたいなね。

齋藤 なるほど。

内田 見え方が違うわけですよ、同じことやっても。

齋藤 それももう、完全に他人から人から見た印象で決まってくるっていうことですよ。

内田 そうそう、そうなんですよ。

齋藤 なるほど。

内田 で、また話、何回も逸れちゃいますけど、萌の人は可愛いから可愛がられる。可愛がられたやっかみで、いじめられることも多い。

で、いじめられるってのは、やっかみもあるんだけど、もう一つの要素として、勝てそうっての、あんですよ。

いじめって、子どもの頃思い出してみたら、なんとなく想像できると思うんですけど、自分より強そうな人いじめれないっすよね。

齋藤 厳しいですね。

内田 正直。

齋藤 ちょっと、やられたらどうしようみたいな感じになりますよね。

内田 そう。だから、いじめってのは正直、弱そうな子に矛先が向いてしまうって傾向、あるんですよ。よく考えたら子どもの頃って、子どもの頃のレベルの考え方しか持てないっすよね。

齋藤 そうですね。

内田 だから、子どものときのレベルの考え方によって、いじめたり、いじめられたりって起こってききました。

だけど、いじめられたってことは一生残るじゃないですか。本当は途中で目覚めるべきなんです

よ。あれ、ところで、子ども対子どものことだったなって。で、私今、大人だ。子どもの頃いじめられたことなんて、もしかして他愛もないことだったかもって。

これ、心理学用語でリフレーミングっていうんですけど、フレームを新しくするって。フレームってのはそれに対する、そのできごとに対する見方なんですけど、それってほとんどの人が上手にできないわけなんですよ。

だからこの魅力の解析によってもそういうの、解放されてくってのがあって。

齋藤 じゃあ、この魅力っていうツールを使って、一種の気づきが得られるっていう。

内田 ある人、いっぱいいますね。だからその萌の人は、いじめられてやだなって思って、強くなったり、可愛い格好止めたりするんですよ。

あるいは、いじめられなかったとしても、可愛がられてること、本人は喜んでないんですよ。なんて思ってるかっていうと、私は半人前扱いされてると思ってるわけですよ。

齋藤 え。そんなこと、思ってたんですか。

内田 そうですよ。可愛がられてラッキーって思っていないですよ。

例えば僕もね。僕どっちかっていうと、男版萌えみたいな。仲間からつけられたあだ名が萌え男ですから。

齋藤 萌え男。

内田 僕、萌え男。なんか可愛いみたいで。

僕、子どもの頃とかに、この問題分かるかって先生によく聞かれたんですよ。

じゃ、やってみろって、やってるじゃないですか。ぐるぐる周りを歩くじゃないですか。あんときにこうやって顔近づけてきて「これ、お前分かるか」みたいな。

齋藤 そういう人、いました。

内田 いわれてる人、いたでしょ。

齋藤 私はそれが凄い羨ましかったです。

内田 羨ましいでしょ。

齋藤 はい。

内田 なんであの子ばかりってなるじゃないですか。

齋藤 そうなんです。

内田 でも肝心ないわれてるこっちとしては、分かりますけど、なんで、同級生でしょ、みたいな。

なんなら私、優れてるほうですけど、みたいな感じで、なんで私そんなこといわれなきゃいけないんだろってなるんですよ。

齋藤 そうなんですネ。

内田 僕なんて未だに、駅まで1人で行けますかっていわれますからね。行けるわっちゅうの。スマホもあるわっちゅうの、GoogleMap使えるわっちゅうの、とかね。

齋藤 なるほど。

内田 でも、そんなときに僕らはえてして、心配されてくれて嬉しいって思わないんですよ。無能扱いしてんじゃねえよ、みたいな。

齋藤 張りあっちゃってる、ですね。

内田 だからね、萌の人って頑張り屋が多いですよ。

齋藤 確かに、可愛い顔の人が売り上げナンバー1とか取るイメージがあります。

内田 そう。あれは反骨精神があるんです。ほら、どうよって。私できたでしょ。だから認めてみたいな。

齋藤 そんな心が隠されていたんですね。

内田 そうです。だから、できる格好するわけですよ。できそうな格好。

齋藤 リクルートスーツ、ビシって。

内田 そうそう。結構センスもいいから、あんまり全然似合わない格好までいかないですよ。結構、ベージュのパンツスーツとか着てますよ。

齋藤 凄いイメージありますね。

内田 分かる。

齋藤 ハイヒールなんか履いて、カツカツカツっていう。

内田 そうそう。で、顔はキティちゃんみたいな顔してる。

齋藤 キティちゃん。

内田 顔はキティちゃんみたいな顔してるのに、髪ひつつめてね。ひつつめるとちょっと上がるでしょ、こうやって顔が。

齋藤 上がりますね。

内田 そいでね。ちょっと、あっ、決まってるってなんですけど。キティちゃんの顔がちょっとこうひつつめて、顔がキッてなったら、ちょっともったいないでしょ。

齋藤 そうですね。キティちゃんの決め顔はちょっと、なかなかびっくりですね。

内田 でしょ。だからね、そのへんも勿体ないわけですよ。

齋藤 なるほど。

内田 萌には萌の似合う格好もあるわけですよ。

齋藤 じゃ、清は、最後は。

内田 清は癒し系ですよ。癒し系で、もう世界平和が来たような。

齋藤 世界平和。

内田 そうだったんだ、みたいな。だから、妖精とか、女神様とか。あと菩薩様、観音様とかそれ位の、地球にいない感じ。現世にいない感じ。

齋藤 なるほど。それは現世で表すと、どんな有名人が挙げられますか。

内田 仲間由紀恵さんとか。

齋藤 現世離れしてます。

内田 あとは、松嶋菜々子さんとか。

齋藤 美しいですもんね。

内田 あとは、広末涼子さんとか。

齋藤 あの方もですか。

内田 あの方も萌に近いですけど、清だと思うんですよ。

齋藤 そうなんですね。

内田 なんかこう、やたら感じいいんですよ。

齋藤 確かに。感じ悪く思われたいですよ。

内田 清の人はですね、CM 多いんですよ。

齋藤 そうですね。

内田 CM 女優、今いった人たち、CM いっぱい出てますよね。

齋藤 出てます、出てます。化粧品とか。

内田 なんてかっていうと、嫌いな人がいないんですよ。

松嶋菜々子さん、例えばですよ。「私、松嶋菜々子、大っ嫌い」っていつてる人がいたら、その人、性格悪そうじゃないですか。

齋藤 そうですね、ちょっと疑っちゃいますよね。

内田 松嶋菜々子、嫌っちゃうんだみたいな。なんか、清の方を嫌っちゃうと私が正確悪いんじゃないかみたいに。聖域、なんかこう汚してはいけない感じがするんです。

齋藤 汚してはいけない、サンクチュアリがそこにあるみたいな。

内田 そうそう。でもですよ。松嶋菜々子さんのこと、そんな知らないでしょ。

齋藤 知らないですね。

内田 僕も知らないんですよ。だけど、なにか好きじゃないですか。なにかいいじゃないですか。

齋藤 なにかいいです。

内田 激しく好きっていうより、全然嫌いじゃない、みたいな感じ。

テレビ CM って、勝手に流れるじゃないですか。見てたら流れてくるから、凄い好き、あの人っていうよりは、なんかいいなっていう人がいいわけですよ。

齋藤 そのなんかっていうところになんか、魅力が詰まってる感じがしますよね。

内田 逆に、雑誌の表紙は清、少ないんですよ。

齋藤 そうなんですか。

内田 テレビ CM の割には少ないですね。

齋藤 じゃ、雑誌に飾るのは、逆にどういった魅力がある。

内田 艶ですよ。香里奈さんとか。

齋藤 確かにそうですね。

内田 梨花さんとか。艶の人はだから、雑誌の表紙とか、あとブロガーさんとか多いわけですよ。

なんていうの、見に行きたい人が見に行くって感じなんですよ。さらっと流れてきたら、そこまで芸能人の方、一流なんでね。嫌いって人、限られてると思うんですけど。

好き嫌いが分かれるってのもあるんですよ。

齋藤 そうですね。確かにそれは。

内田 でも、一部の人に熱狂的に支持される。だから、テレビCM、もちろん出ますよ。けど雑誌とか、ブロガーさんとかしたほうが、影響力が出やすいんですよね。

齋藤 そうですよね。なんか雰囲気はそれだけで、なんかその人のカラーみたいなのが出てますよね。

内田 そうそう。でしょ。

齋藤 魅力はそういうふうに見ることもできるんですね。

内田 できるんですよ。

齋藤 そうすると、魅力マトリックスというものを使って、メイクだったら美塾で。

内田 そうですね。

齋藤 通えばできると思うんですけど、今出てきたファッションっていうふうになると、どうなんですか。

内田 そうなんですよ。だからもちろん、そういった要素でファッションのこう、提供してる専門家さんとか、あるいは、メディアはほとんどないのかね。

考え方とかはあるとは思いますが、僕ファッションの専門家ではないですけど、やっぱりそのハピアカとかやって、凄いな中でもやっぱりファッションのリクエスト多かったし。

僕、専門的にやってないけど、かなり知ってるっていうか分かってて。正直いうと、やりたくないんですよ、あんまり。

齋藤 え、そこをなんとか。

内田 そうそう。でも、やります。やりました。

なんでかっていうと、メイクはその場でパパッとできるんですよ。それがもう凄く強みで、あとはちょっと濃かったら薄くしたり、この色じゃなかったらこの色とか、この色だけちょっと狭くとか、その場でいくらかでも対応できるんですけど。

お洋服だとなんか、これがダメだったら本当はもうちょい淡い色がいいのになってきたときに、淡い色がどこにあるかの分かんないっていう。じゃないですか。

だって、メイク用品位、細かいグラデーションで洋服って作られてないでしょ。

齋藤 それはないですね。

内田 ないでしょ。

齋藤 はい。

内田 だから、もどかしいんですよ。だからちょっと、どうしても1個1個時間かかっちゃうっていうので、二の足を僕が踏んでたっていうのもあるんですよ。

だけど今回ね、こうやって企画になったので、精一杯できるだけ、できる限りのことね、さしていただくとは思っています。

齋藤 じゃあ、そこを詳しく教えていただきたいんですけど。

内田 それはもうちょっと、次だよね。一旦、続きになりますよ。

齋藤 はい。ではまた、次回。

内田 次回はもうちょっと、それに対して解説をしていきたいなど。

齋藤 魅力とファッションの解説をしていただける。

内田 魅力に合ったコーディネート、ファッションっていうのはどういうものなのかっていうの、もうちょっと踏み込んでね。お届けしたいと思います。

齋藤 はい、それでは次回は期待しましょう。では、ありがとうございます。次回も見てください。